

商品の販売について

加茂川 益 郎

はじめに

資本の流通過程に特有な「不確定性」の問題については、すでに拙稿『商業資本と平均利潤¹⁾』において若干の理論的叙述をおこなった。そこでは、この「不確定性」は個別産業資本の流通過程のそれとして、具体的には個々の産業資本の販売の偶然性として規定された。しかしながら、かかる販売の偶然性は主題の要請から、すなわち商業資本によって解決されるものとしての偶然性であったがゆえに、商品の社会的な需要と供給の均衡を想定してもなお問題にしうるものであった。しかし、資本の流通過程における販売の偶然性は、商品の社会的需給の均衡下でのみ論じつくされるものではなく、販売の困難性の問題としてより一般的に考察されるべきものである。本稿の課題もまたそこにある。

注 1) 「千葉敬愛経済大学研究論集」第17・18合併号所収

I

マルクスは『資本論』において、産業資本の理論的導出に先だって、すなわち第一部第一編第3章「貨幣または商品流通」で販売の困難を「命がけの飛躍」(Salto mortale)として注目すべき見解を提出している。まずこの点からみていこう。

商品の交換過程は、つぎのような形態変換において遂行される。

商品——貨幣——商品

W——G——W

質料的内容からすれば、この運動はW——Wであり、商品と商品との交換であり、その結果のうちへ過程そのものが消失するところの社会的労働の質料変換である。

W—G、商品の第一の姿態変換または販売。商品価値が商品の身体から金の身体にとび移ることは私が他の箇所で見つけたように、商品の命がけの飛躍である。もしそれが失敗すれば、なるほど商品はひどい目にあわないが、しかし商品所有者は確かにひどい目にあう。社会的分業は、彼の欲望を多面的ならしめると同じように、彼の労働を一面的ならしめる。まさにそれ故にこそ、彼にとっては、彼の生産物は交換価値としてしか役に立たぬのである。だが、彼の生産物が一般的な・社会的に妥当な・等価形態を受けとるのは貨幣においてに他ならず、しかもその貨幣は他人のポケットにあるのである。貨幣をそこから引出すためには、その商品は何よりもまず、貨幣所有者にとっての使用価値でなければならない、かくして、その商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されておらねばならぬ（『資本論』長谷部文雄訳、青木書店第一部上冊 223 頁）

W—G—W（後者のWは前者のWと使用価値を異にするのであって、その点を明確にするために以後 W' とする）は、確かに「その質料的内容からみれば、この運動は」 W—W' であって、「その結果のうちへ過程そのものが消失する」。したがって中間項たる貨幣Gは W——W' の媒介物たるにすぎない。しかしまた、この W——W' が貨幣Gを媒介にせざるをえないということは、この過程がたんなる物々交換の過程ではないということを示しているのである。商品Wの販売たるW—Gは貨幣Gの所有者にとってはこの商品の購買過程たるG—Wとしてあらわれ、また販売の

結果得たる貨幣Gによる他の商品 W' の購買過程 $G—W'$ は W' の所有者にとってはその販売過程 $W'—G$ である。商品所有者の $W—G$ は貨幣所有者の $G—W$ であり、貨幣所有者の $G—W'$ は商品所有者の $W'—G$ である。正に「一商品の総態的姿態変換は、その最も簡単な形態においても四つの極と三人の登場人物とを内蔵している」(同上書, 231 頁) といえるのである。しかも、この $W—G$ が同時に $G—W$ であり、 $G—W'$ が同時に $W'—G$ であるということは、たんに「一個の過程が、二面的な過程——商品所有者の極からは販売、貨幣所有者の反対極からは購買——である。あるいは購買は販売であり、 $W—G$ は同時に $G—W$ である」(同上書, 227 頁) といってすまされないものを含んでいる。この商品の販売 $W—G$ は、商品 W が自立的に貨幣 G に転化する——いわゆる「商品の貨幣への転形」(同上書, 227 頁) ——をなすものではないのであって、貨幣所有者による購買 $G—W$ によってはじめて実現されうるものなのである。貨幣の購買手段としての機能こそが、この販売過程 $W—G$ を可能にさせる動力なのである。商品の価値形態の展開は、商品の他の商品に対する交換可能性を特殊の一商品たる金に全面的に委譲することによって、この金を貨幣たらしめ、したがって貨幣こそが唯一商品に対する直接交換可能性を持つものとして、商品を購入しうることになったのである。¹⁾ 貨幣による購買によってはじめて商品の販売は実現され、その価値を尺度されることにもなるのである。商品の販売 $W—G$ はこの購買 $G—W$ によって達成されるいわば受身的なものであって、マルクスのいわゆる「命がけの飛躍」——「商品の第一の姿態変換または販売。商品価値が商品の身体から金の身体にとび移ること」の困難——の形態的根拠はここにあるといっ
てよい。それゆえに、マルクスは、商品が「一般的な・社会的に妥当な等価形態を受けとるのは貨幣においてに他ならず」、貨幣を「他人のポケット」から「引出すためには」「その商品は何よりもまず、貨幣所有者にとっての使用価値でなければなら」ないと言わざるをえなかった。けれど、商

品の販売 $W-G$ が貨幣所有者による商品の購買 $G-W$ によって実現しうるものとすれば、かかる商品の「貨幣所有者にとっての使用価値」こそが貨幣所有者による購買——商品の販売——を左右するものとして決定的に重要であるからである。

ところで、 $W-G-W'$ は、 $W-G$ （「商品の貨幣への転形」）と $G-W'$ （「貨幣の商品への再転形」，同上書，222頁）との一つの継起的な過程として、すなわち販売と購買との統一——「購買するための販売」（同上）——としてみるならば、第一過程たる $W-G$ は、他の商品の「³⁾姿態変換を終結させる」（同上書，232頁）第二過程 $G-W$ を、また第二過程たる $G-W'$ は、今一つの商品の「姿態変換」の最初の過程 $W'-G$ を形成するのである。だから、「それぞれの商品の姿態変換系列がえがく循環は他の諸商品の諸循環と解けないように絡みあっている」（同上）のであり、「その総過程」（同上）は、商品の社会的な持手変換を遂行するものとして「商品流通」を形成し、貨幣はかかる「商品流通の媒介者として」（同上書，235頁）流通手段という新たな機能を受けとる。すなわち、商品流通を形成する形態的動因は貨幣の購買手段としての機能にあるのであり、流通手段としての貨幣の機能はこれを結果的に社会的な商品交換の側面においてとらえたものといえるであろう。

ところで、このような商品流通は、その背後にある何らかの生産過程、何らかの社会的物質代謝過程によって可能ならしめられていることは当然としても、その生産過程が、したがってまた社会的物質代謝の過程がいかにしてなされているかは、ここではなお問題にしないしまたその必要もない。単なる商品、貨幣の考察においては、その背後にあるそれら社会的物質代謝過程の特定の内容を論ずる必要はないし、またそれはかえって商品、貨幣の形態規定を不明瞭にするといわざるをえない。

注 1) マルクスは、商品の価値形態を明らかにする前にすでに、商品の使用価

値を捨象して、商品の価値を「抽象的・人間的労働に還元」し、商品の生産に「社会的に必要な労働時間」（前掲『資本論』第一部第一編第1章「商品」，120頁）によって価値規定を展開している。したがって、商品の価値は商品に対象化された「社会的に必要な労働時間」の単なる外被にすぎないものとなり、商品の価値形態における二商品の関係も、すでに対象化された同量の「社会的必要労働時間」を含んだ価値をもつものとして等置され、単に二商品の使用価値としての交換比率を示すものになっているにすぎない。このような価値形態論では、何故二商品の直接的交換が不可能か、ひいては貨幣の必然性は決して明らかにならない。『資本論』の冒頭「商品」において労働価値説を論証するマルクスの方法的欠陥が価値形態論に与える制約を指摘し、価値形態論の意義を明確にしたのは宇野弘蔵である。宇野は、商品の価値形態を、「商品の価値が、その所有者によって、他の商品の使用価値で表現されるという商品に特有なる価値表示の方式」（『経済原論』岩波全書，23頁）と規定し、この価値表現は商品「所有者の主観的評価」（同上書，24頁）にすぎなく、相対的価値形態にある商品の所有者は、自らは交換を実現しえないのに反して、等価形態にある商品の所有者は「直ちに交換しうる地位におかれているのである」（同上書，25頁）。したがって、それは「20 エルレの亜麻布＝1枚の上着 すなわち、20 エルレの亜麻布は1枚の上衣に値するという表現は、1枚の上着＝20 エルレの亜麻布 すなわち、一枚の上着は20 エルレの亜麻布に値するという」ような「逆の連関」（前掲『資本論』第一部第一編第1章「商品」，135頁）を直ちに含んでいるとはいえないのである。

相対的価値形態にある商品と等価形態にある商品のこの関連は、価値形態の最終的な展開である貨幣形態においても変わりはないのであって、貨幣は一般的等価物として社会的に唯一直接交換可能性を与えられる。したがって、貨幣による購買によってはじめて商品は貨幣と交換されることになる。

- 2) マルクスは、貨幣の「第一の機能」としての「価値の尺度」機能を、「商品世界にたいしその価値表現の材料を提供する点、あるいは、諸商品価値を質的に同等で量的に比較されうる同名の大いさとして表示する点」（前掲『資本論』第一部第一編第3章「貨幣または商品流通」，205頁）に求めるのであるが、これは貨幣形態にすぎない。商品の価値を価格として表示する貨幣形態においては、価格はまだ商品所有者の主観的評価にすぎないのであって、その商品の需要者たる貨幣所有者によって購買されて初めてその価値を社会的に確認される。貨幣の価値尺度機能は、貨幣による商品の購買によって発揮されるものなのである。しか

も、それは、売れなければ価格を下げ売れば価格を上げるという過程のうちに発揮されるのであって、「価値尺度としての貨幣」はたんに「諸商品の内在的価値尺度たる労働時間の必然的な現象形態である」(同上)とはいえない。貨幣に特有なこの価値尺度機能については、宇野弘蔵の論稿『マルクスの価値尺度論』(「マルクス経済学原理論の研究」岩波書店)を参照されたい。

- 3) マルクスは $W-G-W$ を商品の「姿態変換」の過程としてとらえ、商品の価値がそれ自身主体として運動して、商品、貨幣の姿態をとるかのごとくいっている。すなわち、「商品の交換過程は、相対立しかつ相互に補足しあう二つの姿態変換——商品の貨幣への転形、および、貨幣から商品への商品の再転形——によって成就される」(前掲『資本論』第一部第一編第3章「貨幣または商品流通」, 222頁)と述べているのであるが、この過程は貨幣による商品の購買を通して実現されるものであって、商品価値を自ら姿態変換する主体としてはとらえられない。

マルクスの上にみたような理解がなされる背景には、既述したごとく、商品も貨幣も、同量の社会的に必要な労働量の対象化されたものとして同一の価値をもつという考えがある。しかし、流通論における価値の規定は、貨幣による購買のうちに形成される価格以上には進展しえないものであって、生産過程によって、価値規定の「内容」へ言及することは無用である。この点については、渡辺昭「価値尺度としての貨幣」(和歌山大学『経済理論』第69号)を参照されたい。

II

マルクスは商品交換 $W-G-W'$ における $W-G$ の困難を「命がけの飛躍」と命名し、その根拠を正当にも商品が「何よりもまず、貨幣所有者にとっての使用価値でなければなら」ないところに求めたのであったが、さらに進んでこの「貨幣所有者にとっての使用価値」を「社会的欲望」(同上, 224頁)——すなわち社会的需要——としてとらえ、 $W-G$ を社会的に考察しようとする。

貨幣をそこから引出すためには、その商品は何よりもまず、貨幣所有者にとっての使用価値でなければならず、かくしてその商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されておらねばならぬ。または、社

社会的分業の環たる実を示さなければならぬ。しかるに分業は一つの自然発生的な生産有機体であって、その構造は商品生産者たちの背後で織りあげられたのであり、また織りつづけられてゆくのである。その商品は、ひょっとすると、新たに生じた欲望を充たすと自称する・または自分の腕でこれから喚起しようと欲する・ある新たな労働様式の生産物であるかもしれない。ある特殊な労働遂行は昨日はまだ一個同一の商品生産者の多くの諸機能中の一機能であったが、ひょっとすると今日はこの結びつきから分離し、自立し、そしてまさにそれ故にこそ、その部分生産物を自立的商品として市場に送るかもしれない。諸事情はこの分離過程のために熟していることもあり、熟していないこともある。その生産物は今日はある社会的欲望を満足させる。明日は、それはひょっとすると、ある類似の種類生産物によって、その席から全部的または部分的に駆逐されるであろう。たとえわが亜麻織物業者の労働のごとき労働は社会的分業上の特許された環だとしても、それだけではまだ決して、まさに彼の20エルレの亜麻布の使用価値が保証されているわけではない。亜麻布にたいする社会的欲望が、——そしてその欲望には、他のあらゆる欲望と同じく、その限度がある、——すでに競争者たる相手の亜麻織物業者によって充たされているとすれば、わが友の生産物は過剰となり、余計となり、したがってまた無用となる。もらった馬の口をのぞいてみる者はない〔もらい物にケチをつける者はない〕が、しかし彼は贈物をするために市場にやって行くのではない。だが仮りに、彼の生産物の使用価値は確かだとし、したがってまた、貨幣がその商品によって惹きつけられるとしよう。ところが今度は、——どれだけの貨幣が？という問題が生ずる。その答えは、もちろん既に、その商品の価値の大いさの指標たる価格によって予報されている。吾々は、商品所有者のおかしかねない純粹に主観的な誤算は度外視しよう、——それは市場でただちに客観的に訂正されるのだ。彼はその生産物に、社会的に必要な平均労

働時間だけを支出したはずである。だからその商品の価格は、その商品に対象化されている社会的労働の分量の貨幣称呼に他ならない。ところが、わが亜麻織物業者の許可なしに、しかも彼の背後で、古くから確実な根拠をもっていた亜麻織物業の生産諸条件が激変をきたしたとしよう。昨日は疑いもなく、1 エルレの亜麻布の生産のために社会的に必要な労働時間であったものが、今日はそうでなくなるのであって、そのことは、貨幣所有者が、わが友の種々の競争者たちの値段表から極めて熱心に立証するところである。彼には不幸なことだが、世間には織物業者が多いのだ。最後に、市場にある亜麻布のどの一片も社会的に必要な労働時間のみを含んでいるものと仮定しよう。それにも拘わらず、これらの亜麻布の総額は、過剰に支出された労働時間を含んでいることがありうる。市場の胃の腑が亜麻布の総量を1 エルレにつき2 シリングという標準価格で吸収することができないならば、そのことは、社会的総労働時間のあまりに大きな部分が亜麻織物業の形態で支出されたということを証明する。その結果は、亜麻織物業者の誰も彼もが自分の個別的生産物にたいし社会的に必要な労働時間以上の労働時間を費したのと同じことである。この場合には、共にくくられ共に絞られるというわけである。市場にある一切の亜麻布は一個の取引物品としてのみ意義をもち、その各片は可除的部分としてのみ意義をもつ。また事実上、どの1 エルレの価値も、実は同等な種類の人間的労働の社会的に規定された同じ分量の物質化に他ならない。(同上、223 ~ 225 頁)

ここで設定された「社会的分業」は意識的計画的なものではなくて「自然発生的な生産有機体」であり、「独立の私的生産者」(同上、226 頁) たちによって営まれるいわゆる単純商品生産社会を指すと思われるが、そこでは「社会的欲望」——社会的需要の質的あるいは量的あり方は「独立の私的生産者」たちにとっては前もって知る術のない未知のものとしてあら

われ、したがって彼らの生産する商品が「社会的欲望」に合致するかどうかは「市場に送」ってみてはじめてわかるものとなっている。「生産物は今日はある社会的欲望を満足させる」としても「明日は、それはひょっとすると、ある類似の生産物によって、その席から全部的または部分的に駆逐される」かもしれないのである。しかしまた、商品の使用価値そのものは社会的に有用であったとしても、「標準価格」で販売されるとは限らない。すなわち「市場にある亜麻布のどの一片も社会的に必要な労働時間のみを含んでいるものと仮定」しても、それは直ちに商品の価値を決定するものではない。「市場の胃の腑」が「標準価格」で「吸収することができない」場合には、「亜麻織物業者の誰も彼もが自分の個別的生産物にたいし社会的に必要な労働時間以上の労働時間を費したのと同じこと」になるという¹⁾。もとより需要そのものが価値を形成するわけではない。ただ需要は流通過程における価値規定（価格形成）に対して消極的な制約を与えるものとなるのである。前にも述べたように商品の価値は貨幣の購買手段としての機能の行使によってはじめて尺度され、社会的に客観的なものとして評価されるのであって、需要は貨幣による購買において発動しうるのである。

かくして「独立の私的生産者」達の生産物たる商品が「社会的欲望」——社会的需要——に適合するかどうかは貨幣によって購買されてみなければわからないものであるが、もし売れなければ価格を下げてでも需要の発動を促すであろうし、売れば価格を上げてさらに売ろうとするであろう。貨幣の購買手段としての機能はかかる商品の売買過程において、商品の価値を尺度しつつ商品の需給の調節を可能ならしめる形態²⁾として理解されなければならない。しかしながら、何故社会的需要がそのようなものとしてあらわれるか、すなわち商品流通の背後にあって、社会的需要の傾向を決定づける社会的物質代謝の過程の内容はここではなお問題にしえないし、したがってまたかかる社会的需要に対して、供給をいかに適応せしめ

ていくか、それを遂行する機構も明らかにしえないのである。

しかしながら、マルクスはひきつづいて、「かように、商品は貨幣を恋しているが、しかし、『まことの恋路はとかくままならぬもの』である。自己の分散した諸環を分業の体制において表示している社会的生産有機体の量的編成は、その質的編成と同じように自然発生的・偶然的である。だから、わが商品所有者たちは、彼等を独立の私的生産者たらしめる同じ分業が社会的生産過程およびこの過程における彼等の諸関係をば彼等自身から独立のものたらしめるということ、諸人格相互間の独立は全面的な物象依存の一体制によって補足されるということを発見する」（同上書、225～226頁）というのであって、単純流通に関する考察も「自然発生的・偶然的である」「社会的生産有機体」の「量的編成」および「質的編成」とからませてなされており、形態規定に不明確なものを残すことになった。また他方では、マルクスが想定する「自然発生的・偶然的」な、いわゆる無政府的生産としての分業社会は、たしかに資本主義的生産様式の支配する社会の一面を抽象しえているとしても、資本主義的生産は単にその「質的編成」と「量的編成」において「自然発生的・偶然的である」とはいえない。労働力の商品化に基づいて、あらゆる生産物を商品として生産する資本主義的生産様式は、それが一社会を確立せしめる限りにおいては、商品生産の「量的」および「質的」編成を必然的な関連のもとにおくことになる。マルクスの中途半端なる分業社会は資本主義的生産のこの面を看過しているものといわざるをえない。かくて、マルクスが、「分業は、労働生産物を商品に転化させ、かくすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然ならしめる」（同上書、226頁）といっても、マルクスのたんに「自然発生的・偶然的である」にすぎない分業社会では、とうてい「労働生産物の貨幣への転化」を「必然ならしめる」と規定しえないのである。だから、マルクスはすぐ後で、「同時にそれは、この実体的転化が成功するか否かを偶然たらしめる」と言い直さざるをえなかったのである。

単なる商品および貨幣を考察する限り、商品の販売 $W-G$ は、個々の商品所有者にとっては単なる可能性、したがってまた偶然性³⁾としてあるにすぎない。しかし、なおかつ、商品の「貨幣への転化」によって商品流通 $W-G-W'$ を問題にしえたのは、諸商品の社会的な持手変換を要求する何らかの社会的物質代謝過程を背後に想定したからに他ならない。 $W-G-W'$ が、社会的物質代謝過程の内容との関連において必然的なものとして規定できるのは、資本の生産過程を基礎にした社会的物質代謝過程においてである。そこでは商品はもはや単なる商品としてではなく、資本によって生産されたものとして、したがって $W-G-W'$ は「資本の流過程」⁴⁾のうちに再現される。しかも、かかる「資本の流過程」は「資本の生産過程」を「資本の再生産過程」——社会的再生産過程——へ媒介するものとして、需要の発動たる購買も商品の供給も一定の社会的相互関連の下におかれざるをえないのである。かくて $W-G-W'$ は社会的物質代謝過程——社会的再生産過程に不可欠の過程として必然化される。

注 1) この点は、需要の価値規定に及ぼす影響を考慮したものとして積極的に評価しなければならないが、その場合、流過程における価値(価格)変動に対して、「社会的に必要な労働労働時間」による「価値」を基準としているのはなお早計とはいえないか。価格変動のうちに多かれ少かれ一定の基準が生ずるとしても、この基準の根拠は単なる流通論においては問題にならないのではないか。その点考究を要するところである。

2) この点を明確にしたのは宇野弘蔵である。前掲論文を参照されたい。

3) この点に関しては、渡辺昭「価値と生産価格(8)」(和歌山大学『経済理論』160号, 1977年11月)の70~71頁を参照されたい。

4) 労働者が労働力を売って貨幣を得、この貨幣で生活資料を購入する $A-G-W$, および資本家が生産物を販売して得た貨幣の一部分(剰余価値部分)で自己の生活資料を購入する $w-g-w$ はそれ自体資本の流通をなすわけではない。しかし、資本の流通運動によって引き起される商品流通である。

Ⅲ

資本主義社会では、あらゆる生産物は商品として資本の生産過程によって生産される。しかし、この生産過程の主体的要素である労働力だけは資本によって直接生産されないのであって、これに対しては、資本は相対的過剰人口の形成によって労働力を確保することになるのである。これによって、資本は生産を拡大し蓄積をも進めうることになる。

さて、生産が資本によってなされるとすれば再生産も当然資本の再生産として行なわれるが、その場合、労働力商品が確保されるとすれば、生産手段が補填ないし追加されなければならないのであって、社会的にこれらが生産されておらなければならない。さらに直接生産過程に必要でないとはいえ、労働者の労働者としての生存維持および資本家の生活に必要な生活資料のための消費資料もまた生産されておらなければならない。そこでは、資本は自己の生産物たる生産手段を直接、自己の生産過程の更新ないし拡大に必要な生産手段の補填ないし追加に使用しえないし、また自己の生産物たる消費資料も直接、資本家の生活資料としてあるいは労賃の支払いに代えることはできないのであって、生産物を販売して得た貨幣をもって、生産手段と労働力を再購入しえ、生活資料をも確保することができる。したがってこのような資本の再生産が社会的一般的に行なわれ、社会的再生産過程が円滑に進行するためには、生産手段と消費資料としてある諸商品は一定の関連の下に、自己の需要するものは必ず他のものによって供給されておらなければならない、自己が供給するものは必ず他の者によって需要されなければならないのであって、たがいに需要するものを供給することになる¹⁾。マルクスの再生産表式は、この社会的関連を社会的総資本の生産物を起点とする再生産過程として明らかにしたものである²⁾。

マルクスは、「社会の総生産物」——社会的総資本の生産物——を素材的（「質料」的）に、生産手段および消費資料（「消費手段」）を生産する

ための生産手段を生産する第一部門と、消費資料を生産する第二部門に分け、社会的総資本の運動においてなされる「価値填補および質料填補」を次の「三大支点」（同上書第二部『資本の流通過程』，第三編第20章「単純再生産」，519頁）によって考察している。すなわち，(1)労働者の労賃と剰余価値とが，第二部門内部で第二部門の生産物（消費資料）と交換される，(2)第一部門の現物としては生産手段として生産されたが，価値としては第一部門の資本家と労働者によって消費資料に支出されるべき部分と，第二部門の現物としては消費資料であるが価値としては生産手段の補填にあてられなければならない部分との交換，(3)第一部門内部で消費された生産手段の価値および素材の補填にあてられなければならない，第一部門内部での交換がそれである。ここで再生産の基本的条件が(2)によって示された³⁾。

以上のように，質的に区別される三つの「交換」によってなされる，社会的総資本の生産物の価値および素材填補のうちに，社会的再生産が遂行されるのであって，資本の生産物としての商品はそれぞれ，生産手段ないしは消費資料としてこのような社会的交換の一環を形成する。諸商品は素材的（使用価値的）にも価値的にも，たがいに需要するものを供給しあっているのである。ここではあの「命がけの飛躍」——販売の困難は問題にならない。それは正に社会的総資本の再生産過程の必然性に規定された諸商品の全面的な交換のうちに解決されるものとなっている。

この資本主義的生産に内在する本質的な法則，すなわち，「資本の再生産過程」はあらゆる社会に欠くことのできない社会的再生産の諸条件を必ず満たさなければならないということは，しかしながら，資本主義的生産においてはそのまま直接的に，それ自体を目的として実現されるものではなく，資本の動機ないし目的たる利潤率を誘因とした資本の競争過程のうちに貫かれるのである。すなわち，社会的再生産にとって不足している商品は，価格の上昇による利潤率の上昇をもたらして資本によるその商品の生

産増加を促し、逆に過剰に生産された商品は、価格の低下による利潤率の下落をもたらす、資本によるその商品の生産はさし控えられることになる。社会的再生産過程の諸条件は、資本主義的生産においては、利潤率を基準にした、資本の生産諸部面——あの生産手段および消費手段という二大部門ではない——への流出入運動のうちに実現されるのであり、したがって、常に事後的な訂正を通して達成されるのである。それは、変動する需要に対して、価格の運動を媒介にした——したがってまた利潤率の騰落によって——資本による生産物の供給を適応させていく、つまり需給の不均衡を均衡化していく資本主義に特有な機構であるといつてよい。かくて、資本の生産物としての商品については、その販売の偶然性は、社会的再生産過程に根拠をもって形成される需要に対し供給を適応せしめる過程のうちに解消される傾向にあるといつていいであろう。

しかし、このように、一定の使用価値を持った商品それ自体に関する販売の偶然性ないし困難は、機構的に不断に解消せられる傾向をもつとしても、この同一商品を販売する各個別資本においては、その販売の個別性、分散性⁴⁾によって同一の販売条件を持たないのである。そこに、各資本間における販売の偶然性（不確定）は残り、販売期間に相違を残すことになる。かかる販売の偶然性、販売期間の相違は、商業資本による販売期間の短縮・均一化によって除去されるであろう。この点はすでに別の機会で論じた⁵⁾とおりでである。

注 1) しかし、この関係は資本主義的商品生産においては直接実現されるものではない。価格の騰落によって引き起される利潤率の変動を媒介にして、資本が需要に対して供給を適応せしめるというやり方でなされるのであって、「まさに、生産物交換〔物々交換〕の場合に見られる自分の労働の生産物の譲り渡しと他人のその譲り受けとの間の直接的自己同一性」（前掲『資本論』第一部第一編第3章「貨幣または商品流通」、234頁）においてではない。宇野前掲『経済原論』116頁参照。

2) 「年生産物は、社会的生産物のうち消費元本に帰属して労働者および資本家によって消費される諸部分と同様に、資本を填補する諸部分すな

わち社会的再生産をも含み、したがって個人的消費と同様に生産的消費をも含む」(前掲『資本論』第二部第三編第20章「単純再生産」, 512頁) のであって、この「生産的消費」および「個人的消費」がいかになしておこなわれ、「年生産物」「 W' 」の各価値部分はどうなるか」(同上書, 513頁)を明らかにするためには、社会的総資本の生産物(「年生産物」)を起点としかつそれを終点とする運動形式のうちに考察されなければならない。商品資本の循環形式 $W' \cdots W'$ はまさにこの理解に適した循環形式である。商品の消費過程のうちに商品を再生産するというこの形式は、社会的総資本の生産物の消費過程のうちに社会的総資本の生産物を再生産するという社会的総資本の運動を理解しえる形式であり、したがって社会的再生産の諸条件を考察し、認識しうる。

なお、資本の循環に関しては、日高普『資本の流通過程』(東京大学出版会; 1977年)が特異な見解を提出している。日高はその第一編「資本の循環」において、マルクスのように個別資本について貨幣資本、生産資本、商品資本の循環をそれぞれ問題にするのは形式的だとし、個別資本の運動は「かね儲け」(同上書, 89頁)をあらわす貨幣資本の循環形式 $G \cdots G'$ であらわし、社会的総資本の運動は $W' \cdots W'$ であらわし、かくして「資本循環論は、個別資本の流通過程を取扱う流通過程論と、社会的総資本の流通過程を取扱う再生産過程論の移行に位置しなければならない」(同上)と唱えている。本稿との関連でいえば、商品資本の循環形式は社会的総資本の再生産を理解するのに適した形式であるというのではなく、それは社会的総資本の再生産を理解するのにのみ問題にされるべきだとするものである。これらの点に関してはまた別の機会に論じたい。

- 3) (2)の関係は周知のように $I(v+m) = IIc$ という等式で示される。これに対して拡大再生産の基本的条件は $I(v+m) > IIc$ である。しかし、この場合でも、第一部門と第二部門との交換は上の等式でおこなわれる。この等式のもつ意味については渡辺前掲論文(5)(和歌山大学『経済理論』第150号, 1976年3月)の93頁及び注の(10)を参照。
- 4) 個別販売の偶然性、分散性に関しては、森下不二也『現代商業経済論』(有斐閣)の145頁, 149頁を参照。
- 5) 前掲拙論を参照されたい。